

熊本大学学術リポジトリ

Kumamoto University Repository System

Title	我を包める自然 : 短歌
Author(s)	長谷川, 公一
Citation	龍南會雜誌, 167: 68-70
Issue date	1918-06-20
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	http://hdl.handle.net/2298/6806
Right	

春雨の夜に

二、三、一

鐵

降りしきる春雨の夜にしみじみと古き文見て一人泣きする
ひたひたと身にせまり來る思出にふと振り返る吾と吾影
一日一日別るゝ日のみ近づきぬ又來る春を忘るよな君
南てふ一字を見てはわけもなく寂しくみやる大空の端
何故の心狂ひぞ女々しくも返らぬ人を戀しとぞ思ふ
何事ぞ餘り女々しと人は云ふされど寂しき一人身なれば

我を包める自然

一、二、甲二

長谷川 公一

葉脈の筋を通して朝の日はしづもり入りぬ森のつめたさ、
（以下六首龍田山にて）
濕りたる朝の空氣に呼吸をする杉の林のうす寒さかな、
水深き大海原の底にある都にも似て市は眠れり、
杉林青き女松に朝風はさわさわ鳴れり水の如くに、
阿蘇の山豊後の峯に檜のごと白雲走り日は照り返る、

草を焼く焰ホなるらむ國境の深き山峽ヤマガヒあかあか見ゆ、
阿蘇の山ゆ霧降り込めぬ白川の水面ミナヅラ渡る河鳥の聲、
(以下五首白川にて)

あたゝかき河原カハラを渡る鶴鶴の尾の震へかな春の静けさ、
川端の小石をあぐる日雇の鈍き眼メネコに逝く春を見る、
石積める日雇の娘の赤き髪破れ帯なご川端の晝、
静けさは河原に下りて二つ三つ白き石など積みて見る朝、

大津道箱荷イシヤを積める老馬オウマの汗しんと白き日にじむ、
(以下六首大津街道にて)

アラビヤの駱駝ラクダにも似て一隊の荷馬ニバあへぎ行く午後の光に、
黄キの埃ホコリしらじら光り老馬はいなふきもせず晝深みかも、
嘶セかず足も鳴らさぬ瘠馬の鈍き眼に春の日うるむ、
怖こねたる如くに走る汽動車の後に塵の匍フひて狂へり、
骨つぎの藥を賣らむ鈴鳴らし急ぐともなき旅アキレドの商人、
蒼茫ソウマウと夏の日落ちぬ向つ峯ミネの阿蘇の山脈ヤマナミ雲も動かず、
日を強みつはものが振る劍太刀ツルギタチさんさん光るあはれゆゝしも、
(以下六首渡鹿練兵場にて)

いつさんに兵士ヘイシは走り黄キナき塵しらじら光る六月の午後、
夏若き肥後の平野を水色の風さわやかに桑の葉の鳴る、
いちめんの芝生の上を青き風なめらかにして野ははてしなし、

一本の榎をこめてひそやかに渡鹿の夕べ霧深みかも、
日を白み鋤打ち振れる農人の土に親しむ生活思ふ、（以下三首農人に寄す）
いさゝかの不平もあらずいさゝかの野心もあらず汝はうらやまし、
ばつくりと鋤を起せば土の色新しうして力ひそめり、
愛せむは己にあらず彼ならず石に打たれし小さな草、

白日の夢

二、二、甲二 莊 島 秩 男

あわつけきころにしみるLOCUSをたどるに似たる生活もがな
聖めくころにものを捨てあへぬ凡下のころみだれみだるゝ
このころ石とは化せずひややけきゴーンの瞳に瞰まるともよ
をりをりは大いなることゆめみれどこの淋しさは消ぬべくもなし
信仰を説けば嘲ける若人のざれ唄よりもさびしきはなし
のろのろと山路をくだる幾台の乗合馬車を染むる夕陽
火の山に燃ゆる眞赤き山椿たけゆく春をなやましく咲く
夕まぐれかなしき戀のをはりにも似たる姿に紅椿落つ